

武蔵野幕屋 日曜聖書講筵 詩篇連続講義第4回

栄光の神の来臨

――詩篇第96篇――

1958年2月9日

小池辰雄

あたらしき歌 創造の神 善美 神様の法則・自然の法則 キリストに來なければ 非連続の
連続 創造・救済・完成 聖霊のキリストの来臨 死の竿頭からの突破 魂の創造としての救
済 神は既に地を審かんとて來り給えり 十字架は無言の赦し 眞実と信実 終末的現実 地
上から次の世界に入る 祈り

【詩篇96】

1 あたらしき歌をエホバにむかいてうたえ 全地よエホバにむかいて謳^{うた}うべ
し

2 エホバに向いてうたいその名^{みな}をほめよ日ごとにその救いをのべつたえよ

3 もろもろの国のなかにその栄光をあらわし もろもろの民のなかにその奇^{くす}
きみわざを顕すべし

4 そはエホバはおおいなり 大にほめたたうべきものなり もろもろの神にまさ
りて畏るべきものなり

5 もろもろの民のすべての神はことごとく虚^{むな}しされどエホバはもろもろの天
をつくりたまえり

6 尊貴^{とうぎ}と稜威^{みいつ}とはその前^{みまえ}にあり能^{ちから}と善美^{うるわしき}とはその聖所にあり

7 もろもろの民のやからよ栄光とちからとをエホバにあたえよ エホバにあ
たえよ

8 その聖名にかなう栄光をもてエホバにあたえ 献物^{ささげもの}をたずさえてその大庭に
きたれ

9 きよき美しきものをもてエホバをおがめ全地よその前におののけ

10 もろもろの国のなかにいえ エホバは統治^{すべ}したもう 世界もかたくたちて動
かざるることなし エホバは正直^{なおき}をもてすべての民をさばきたまわんと

11 天はよろこび地はたのしみ海とそのなかに盈^みるものとはなりどよみ

12 田畑との中のすべての物とはよろこぶべし かくて林のもろもろの樹もま
たエホバの前によるこびうたわん

13 エホバ來りたもう 地をさばかんとて來りたもう 義をもて世界をさばきその



まこと
真実をもてもろもろの民をさばきたまわん

●あたらしき歌

詩篇95篇はぬかしまして、今日は96篇です。この詩篇はヤーヴェーの神の――学者がいうのに、「即位の歌」というのがいくつもありまして、この間、表で書きましたが――そのうちの一つに属するとされている。詩篇29篇、33篇、47篇、93篇、97篇というのがそれぞれ95篇もその中に入れていい。

これは実はユダヤでは年の初めの礼拝の祭儀の時に読まれた、歌われた詩篇です。新年の祭の神の即位の歌というようなわけです。大体三つに分かれまして、1節から6節、7節から9節、10節から13節というような構造になっているわけです。第一部では、ここに掲げたように「栄光の神」を讃えています。第二部では、いかに栄光を神に帰しなければならぬかという、「礼拝」のこと。第三部では、その神がきたり給うという、「来臨」するということです。

この詩篇は、どの註解をみてもたいいてい書いてあるんですが、歴代志略上の16章23節から33節に非常によく似ている。ちよつと開いてくらんなさい。

「²³全地よエホバにむかいて謳え^{うた}日ごとにその拯救^{すくい}をのべつたえよ²⁴もろもろの国のなかにその栄光をあらわし もろもろの民のなかにその奇しき^{くす}みわざを顕すべし²⁵そはエホバはおおいなり大いにほめたたうべきものなりまたもろもろの神にまさりて畏るべきものなり²⁶もろもろの民のすべての神はことごとく虚し^{むな}されどエホバはもろもろの天をつくりたまえり²⁷尊貴^{とうとぎ}と稜威^{みいつ}とはその前にあり 能^{ちから}とよろこびとはその聖所にあり²⁸もろもろのたみの諸族^{やから}よ栄光とちからとをエホバにあたえよ エホバにあたえよ²⁹その聖名にかなう栄光をもてエホバにあたえ 献物^{そなえもの}をたずさえて其前にきたれきよき美^{うら}わしき物をもてエホバを拜め³⁰全地よその前におののけ世界もかたくたちて動かさるることなし³¹天はよろこび 地はたのしむべし もろもろの国のなかにいえ エホバは統治^{すべおさめ}たもう³²海とそのなかに盈^みるものとはなりどよみ 田畑とその中のすべての物とはよろこぶべし³³かくて林のもろもろの樹もまたエホバの前によろこびうたわん エホバ地をさばかんとて来りたもう」(歴代志略上16・23・33)

そういったようなことであります。それと非常に内容的に似ているわけです。

「あたらしき歌をエホバにむかいてうたえ全地よエホバにむかいて謳^{うた}うべし
「あたらしき歌」というような言い方をしている詩篇が他にもあります。詩篇33篇をちよつと開きますと、

「ただしき者よエホバによりてよろこべ 讚美はなおきものに適^{あて}わしきなり



2 琴をもてエホバに感謝せよ 十絃^{とおお}のことをもてエホバをほめうたえ 3 あたら
しき歌をエホバにむかいてうたい 歡喜^{よろこび}の声をあげてたくみに琴をかきならせ」
(詩篇 33・1~3)

ここにも「あたらしき歌」というのがあります。それから、40 篇の、

「1 我たえしのびてエホバを俟望^{まちのぞ}みたり エホバ我にむかいてわが號呼^{さけび}をききた
まえり 2 また我をほろび^{あな}の阱^{ひじ}より泥のなかよりとりいだしてわが足を磐^{いわ}のう
えにおき わが歩みをかたくしたまえり 3 エホバはあたらしき歌をわが口に
れたまえり 此はわれらの神にささぐる讚美なり おおくの人はこれを見ておそ
れかつエホバによりたのまん」(詩篇 40・1~3)

「神様はあたらしき歌を私の口に入れてくださった」と書いてある。詩篇 144 篇の 9 節、

「9 神よわれ汝にむかいて新しき歌をうたい 十絃^{とおお}の琴にあわせて汝をほめうた
わん」(詩篇 144・9)

さっきの 33 篇とちよつと似たようなところです。149 篇の 1 節、

「1 エホバをほめたたえよ エホバに對^{むか}いてあたらしき歌をうたえ 聖徒のつど
いにてエホバの頌美^{ほまれ}をうたえ」(詩篇 149・1)

というようなのが、この「新しき歌」という言葉の出ている所です。即ち、新年を迎えて

神の救いを歌うという、外側の気持はそうでしょうけれども。イザヤ書 42 章 10 節に、

「10 海にうかぶもの、海のなかに充^{みつ}るもの、もろもろの島およびその民よ、エ
ホバにむかいて新しき歌をうたい、地の極^{はて}よりその頌美^{ほまれ}をたたえまつれ。」(イ
ザヤ 42・10)

「新しき歌」と第二イザヤの 42 章に出てきています。まだイザヤ書にあつたような気がしま
すが、今ちよつと見つかりません。それから、黙示録 14 章 3 節、

「3 かれら新しき歌を御座^{みくら}の前および四つの活物^{いきもの}と長老たちとの前にて歌う。

この歌は地より贖^{あがな}われたる十四万四千人の他は誰も學^{まな}びうる者なかりき。」(黙

示録 14・3)

というのがあります。

●創造の神

2 エホバに向かいてうたいその名^{みな}をほめよ 日ごとにその救いをのべつたえ
よ 3 もろもろの国のなかにその栄光をあらわし もろもろの民のなかにその奇^{くす}
しきみわざを顯^{あらわ}すべし

さっき開きましたイザヤ書 42 章にも似たような言葉がありまして、6 節、

「6 云^いくわれエホバ公義^{ただしき}をもてなんじを召したり。われなんじの手をとり汝を
まもり、なんじを民の契約^{ちやくぎ}とし異邦^{いこく}人のひかりとなし、7 而^{しか}して瞽^{めし}の目を開



き俘囚^{とらわれびと}を獄^{ひとや}よりいだし、暗^{くろ}にすめるものを檻^{おり}のうちより出^いさしめん。⁸ われはエホバなり是わが名なり。我はわが栄光をほかの者にあたえず、わがほまれを偶像にあたえざるなり。⁹ さきに預言せるところはや成れり。我また新しきことをつげん。事いまだ兆^{きざ}さざるさきに我まずなんじらに聞かせんと。」

(イザヤ42・6～9)

エホバの栄光があらわれて、その栄光は他の神々はこれを現わすことができない、というようなことは、イザヤ書40章にも出ている。これはイザヤ書——特に40章以下の第二イザヤです——第一この詩篇そのものが非常に第二イザヤの角度的詩篇です。

⁴ そはエホバはおおいなり 大いにほめたたうべきものなり もろもろの神にまさりて畏るべきものなり

民族神から、民族的なところから世界神に突き抜けた角度で讃えている。

⁵ もろもろの民のすべての神はことごとく虚^{むな}し

これは偶像にすぎないということも言っているわけです。イザヤ書40章18節にも、

「¹⁸ 然^さばなんじら誰をもて神にくらべ、いかなる肖像^{かたち}をもて神にたぐうか。

¹⁹ 偶像はたくみ鑄^いてつくり、金工^{かぬち}こがねをもて之をおおい白銀^{しろがね}をもて之がために鏈^{くさり}をつくれり。²⁰ かかる宝物をそなえざる貧しきものは朽つまじき木をえらみ良匠^{よきたくみ}をもとめてうごくことなき像をたたしむ。」(イザヤ40・18～20)

神様はこのような偶像的なものでは絶対にならないということです。偶像神に対して非常にはげしく第二イザヤは宣言をしている。24章9節から20節までが偶像に対して非常につきりと書いています。

この詩篇はさきほどの歴代志略上の16章と非常に近似していますが、この歴代志略上の16章というものの自身が勿論——ダビデの原型はあつたにいたるところで——歴史的にいうと捕囚期後の筆がそこに非常にたくさん加わっているということは学者が言う通りであります。それは何処から来ているかという点、第二イザヤの預言から光が来ているので、第二イザヤの預言というものが、むしろこの詩篇の母体であるとみていいだろうと思う。やはりこの詩篇の中には預言者の信仰というものが反映しているものが、それとまた連関しているものが非常に多い。

「もろもろの民のすべての神はことごとく虚^{むな}し」

なんていう、断定的な宣言はアモス以下の預言者たちの偉大な「宇宙神観」というところから来ているわけです。

されどエホバはもろもろの天をつくりたまえり⁶ 尊貴^{とうとぎ}と稜威^{みいつ}とはその前^{みまえ}にあり能^{ちから}と善美^{うるわしき}とはその聖所にあり

⁷ もろもろの民のやからよ栄光とちからとをエホバにあたえよ エホバにあたえよ



神様がいかに偉大な創造の神であるかということが、ここで強く出ているわけです。そして、創造の神は「栄光と力」というようなことが、対句のように出てきますが、「栄光」はまた、「神の衣」というような表現で詩篇百何篇の中で言われているところもあります。神の創造の業の最初は、

「神、光あれと言ひ給ひければ光ありき」

という、この「光」であつた。即ち神様自身は、栄光の中に、栄光を衣^きておられる。栄光を着ておられる神の存在から一番先にこの創造の業としてあらわれて来たのが、やはりこの「光」であつた。何と言つても、「光」というものは、私たちに一番祝福を与えるもので、光がなかったら、即ちそれに対する「暗^{やみ}」です。これは一番その「混沌」「罪」「暗」「死」というような連関において、神の国に反するところの事態です。神の国の象徴は、

「汝らは世の光なり」

という、「光」をもつて――五感の世界でいうならば――「光」をもつて一番表現されるわけです。だから、創造のみ業が、光の角度から現われてきた。そして、神のみ言は、そのような光の世界を現象させるところの力をもっている。想つても「光」は出てこない。即ち神の生命力というものは――暗黒の生命力ではないので――光をもつて現象してくるところの生命力で、これが即ち創造の業です。

●善美

創世記の1章において、

「神かくなし給ひ、即ちよかりき」

と書いてある。神の創造の業はみな「善」である。神様の創造されることの事態は、創られていく事態は、「光」であると同時に、すべてそれはよかつたと、「善」であると書いてある。「善」というような判断は、ただ自然界的な判断ではなくして、これは人間の実存的な人格的な世界におけるところの原理です。原理において「善」というものは、自然界においては「光」ですね。自然界におけるところの一番祝福された事態は「光」です。そしてそれが人格界におきましては、それは「善」と――またある角度からそれを「義」といつてもいい――カントがその道徳哲学の中で「善意志」といった「善」である。これは創造のいとなみの、中核といいますが、大事な性格です。

だから、神様の創られたものはすべて光をふくんでいる。野の花の一つを見ても、神の栄光をそこにキリストは見た。神の栄光を見た。また、私たち人間が創られたということにおいては「善き人」、善です。私たちの道徳の世界では善という概念が、プラトンをまつまでもなく最高の概念です。「至高善」という。プラトンは神のことを「最高善」「至高の善」「善の善なるもの」と言つた。キリストも、

「何ぞわれを善きと言うか、神の他に善きものなし」



といって神を「唯一善」として考えていた。神は「至高善」であると同時に、キリストにとっては「唯一善」である。ただ一つの善である。ここにキリストの言のきびしさ、はげしさというものがある。この福音の世界は、所謂いい加減な宗教性とか、いい加減な道徳性とかいう世界からは、もつと絶対次元的性格をもっている。

即ち、創造はよかったんだが、その善をして善の実力を失ってしまったところにパラダイス・ロストを、我々は樂園を喪失してしまった。ですから、

7 もろもろの民のやからよ栄光とちからとをエホバにあたえよ エホバにあたえよ

「与えよ」とはエホバに「帰せよ」ということ。「エホバに与えよ」とは妙な言い方です、

「エホバに帰し奉れ」

というわけです。ヘブライ語は「与える」という字ですけれども。「エホバに帰する」といつて一向に差支えない。「栄光」という字は「カーボード」という。日本語の新しい訳ではこういうふうになっているかな。

「主に帰せよ」

と。ああ、結構です。「うるわしき」という字は、旧い訳で「善美」と書いてある。私はこういうところは、漢字は非常にいいと思う。「うるわしい」という言葉は日本語では「美しい」だけですけれども、その中に「善美」という「善」の字が入っていることがやはり大事なんです。ただ「美」ではない。ふりがなはなるだけ使いたくないけれども、「善美」と書いて「うるわしき」と読んだ方がいい。「真善美」といいますが、「真」はあとで出てきます。聖なる神は善美、そして力、そして一番あとに義と真実が出てくる。

●神様の法則・自然の法則

「そは聖所にあり」

勿論、これはエルサレム神殿の聖所という具体的な意味をもっていますけれども、しかし、詩篇の終末的な性格から考えて、この聖所はもちろん天の聖所ということとその背後に持っている、私は読まなければならないと思う。

これは確かに第二、第三イザヤの、特に神殿ということになると、第三イザヤの方が強い。神殿における神の栄光という角度はイザヤ書56章以下です。それが今度は、祭儀宗教に堕してしまつて、すっかり所謂神殿宗教になつて、信仰がだんだん形式化してしまふ。祭儀一点張りみたいになつてしまふ。そしてだんだん祭儀または律法宗教になつて、この「真」「善」「栄光」「力」という霊的な本当の実存の世界がだんだん切り換えられてしまふ。それで、硬直してきましたから、キリストが出てこられたわけです。「偽善なる学者パリサイ人」に対してキリストが真っ向から本当の宗教の事態を説明された。これがみなに嫌われたゆえんです。ところが、キリストは実は預言者の宗教をもつとすぐく、それを受けとつて、こ



れを全うされた方です。

詩篇にこうやって歌われていると、詩篇にはたくさん出てきますよ、それで、「ああ、またか」
と思うかもしれない。けれども、この創造の神、神様が天地を創造し、また我々が創造されたものであるということは、いくら頭でそれを理解して整えてみても、それは一向生命
となり力とならない。

「私たちがいかに創られたものであるか、神様はいかに栄光の創造の神であるか」

ということとはやはり私たちは朝、静かに目覚めた静かな時に、雨戸を排して大自然を、朝
の空を見たり、また夜澄んだ星の空をみたり――詩篇8篇もそうですが――この自然の世
界にぶつかって深くそのふところに入るといふようなことも大事なことだと思う。という
ことは、人間界はとかくすると人為的なものに非常に害^{そこな}われている。自然界はそういった
人為的なものの影響をうけない。だんだんこの世界は自然的なものに人為的な力がこれを
あれ「汚染、破壊」してしまいますけれども。

何故、自然がそんなに素晴らしいか。これはやはり神様の大きな法則の世界に、法則の
必然の世界に入って、それでのびのびと神の力を受けて、その恩恵にあずかつてのびて行く。
自然界は人間のような心はない。人間のような魂はないけれども、しかし、この自然の法
則によって、彼らはそれぞれ盛えていくし、またしおれていたり、あるがままの姿を現
わしている。即ち大きな意味における神様の法則の世界を、神の栄光の現われとして自ら
を現わしていますから。そこで私たちが自然に接して神の栄光というものをそこにおいて
見るわけです。創造を見るわけです。

●キリストに來なければ

ところが、人間界をみると、神の栄光というのは見えない。非常に隠されてしまった。
人間を見れば見るほど、神様の栄光からは遠ざかって、

「神様なんかあるもんか」

ということにだんだんなっていく。その「神様はあるもんか」というのは、これは人間が
悪い。ニイチェはとうとう、「神は死せり」なんて言ってしまった。それは人間において神
は死んでいる。神は死んでいるのではない。人間において神は死んでいるものだから、

「神、神と言ったって、神は死んでいるよ」

ということは逆説的に真理なんです、ニイチェの言葉は。「神は死せり」とはどういうこと
かというと、

「人間において神の栄光は現われていない。神の創造のわざが常に展開していない。

人間が何か切り換えをやっている」

ということです。ですから、人間もやはり自然と同じように神の法則の中に入っていかな
ければ、神の光が見えない。神の栄光が見えない。神の創造のわざが見えない。それでは



どこへ行ったらいいか。私たちは神の栄光が人間において最もすぐく現われているキリストに行くより仕方がない。ナザレのイエス・キリストに來れば、ここに來れば本当に神の創造のわざが、

「人あらたに生まれずば神の国を見ること能わず」

と言ったキリストはまさに新しき「新人」である。新しき歌は、キリストにぶつからなければ、新しき歌なんて出てきやしない。この新しさというものは、

「陽の下に新しきものなし、すべてはパンタレイ（流転する）」

というわけで、すべては流転している。そして、なるほど新年が来ればちよつと新しいですよ。けれども、本当の新しさというものは、やはりキリストがもたらした。私たちが新しき歌をうたわんと欲するならば、これはキリストに來なければ新しき歌は出てこない。

新約聖書は「カイナー・ディヤテイケ」といいますが、「カイノス」という「カイナー」という字はそういった意味の新しさなんです。だから、私たちはキリストにおいて初めて新しきに出くわすし、神の光に出くわす、神の善に出くわす。詩篇の作者は勿論旧約の時代ですから、これは仕方がない。それでもこのようにして創造の神を讃美し、そしてもうもの神はみな偶像に等しいので、この神だけが本当であるということ、彼らは神の栄光をやはりとにかく身に受けていたから、これが言えんです。

けれども、我々クリスチャンにおいては、この「光」とか「善」とか「真」とかいうものは、キリストに來て初めてこれを見る。だから、私たちは神の創造のわざ、栄光というものを日に新たにこれを受けとるためには、やはり聖書にぶつかってキリストに來なければいけません。

「聖書は我につきて証するものなり」

ですから、何も福音書に限ったことではないけれども、聖書をひもといてキリストにくる。だから、私たちは詩篇96篇にきて、「我につきて証するものなり」という角度からこれやはり読んでいるわけです。

●非連続の連続

我々は旧き人^{ふる}「旧人」であるが、キリストに來ると「新人」になる。私たちは新人に事実ならなければ、新しき歌なんてものは、口からのぼってこない。

みな光を見ているようだが、実は光を見ていない。キリストに來た人は本当に光を見ている。ここには目の見えない方もいらつしやいますが、イエス・キリストに來た人は、目の見える人よりもこの光を見ているのです。特に福音書にぶつかって、キリストの実存を私たちが身をもつて知る時に――頭ではないですよ――身をもつて知る時に、私たちの心に、全身に光がさす。全身に光が浸透してくるわけです。だから、

「汝らは世の光なり。我を受けよ、さらば汝らは世の光なり」



神の栄光なりと。而してその栄光にあり、

「光あれと言ひ給いければ」

というのは、キリストに來ると、

「光あれ。われ汝のうちに光あらしむる」

ということになります。そして、

「我キリストにあつて光となれり」

です。私たちはここで光をみているのではなくて、光となっているんですから。即ち私たちが本当に見えるというのは、肉眼でも太陽の光を受けて見えるのであって、我々の目に光があるわけではない。私たちの中にキリストという光がきて、そして、今度は光となって光が見えてくる。みなそういうわけです。

だから、キリストは神様から驚くべき創造力を頂いている。あの驚くべき創造力をもっているところの、クリエイティブなパワーを持っているところのキリストは、創造の力を持っている。これは即ち生命力です。この創造してやまない生命力を有っているキリストを受けとることによって、私たちが即ち創造的な人間となる。それで初めて、

「ああ、エホバは、神様は、ヤーヴェーの神としてイスラエルに現われた神は、これは本ものであった。何もイスラエルの神様に限ったことはない。これは全世界の神である」

と、実に第二イザヤは最も徹底的にこれを宣言している。

「我は、我をたずね求めざる民にかえつて呼び求められる」

ということになる。即ちそこらが本当の預言者の言葉です。

「俺たちはアブラハムのすえだぞなんて思ったら、とんでもない間違いだぞ」

と、キリストは言われた。それで、イスラエルの民に、所謂血統的にいくら「ベニヤミンの族、ヘブル人中のヘブル人」などとパウロが言ってみたって、パウロがもしそれをただそれだけとして誇っているなら、それはパウロは馬鹿ですね。けれども、パウロはそんなことを言っているのではない。

「私はいくらヘブル人中のヘブル人であつても、それは何もならん。イエス・キリストを受けとつて初めて本当のアブラハムのすえである」

と。アブラハムのすえは、全世界至る所にいかなる民族の中にも隠れている。

これは即ち神は、道としてはイスラエルを選んだけれども、しかし、神の恩恵は、イスラエルがえらかったから選んだのではない。かたくなな仕様がなない小さな民だったが、そいつを捕えて、とにかく人類への救いというひとつの「道」である。しかし、救いは万民族に、万民に向かつて来ている。

「太陽の光が全世界にあまねくが如く」

と、キリストの言の通りです。そこにおいて正に一視同仁なんです。けれども、それは観



念でない。具体的な世界だから、具体的な一つの方途を通っているだけです。

「いつたい、クリスチャンとはおかしなものだ。イスラエルから流れてきたエホバの神様なんか信じてどういうことになるか」

なんて、そうではない。神様はただその道を通っただけです。神は全世界の神、全宇宙の神です。

それは私たち自身がどんなに瞑想して哲学的に、そんなものを最後の世界神、宇宙神なんてものを考えてみたって、これはダメなんです。事実、イスラエル人がとうとう躓きころんで、不信でもって国は破れてしまつて、惨憺たるものです。そして、キリストがせっかく出てきたのに、イエスを十字架にかけてしまつたというような話さ。だから、選ばれたイスラエルの民なんてのは実は落第しているんです、正直。しかし、その落第しているのに、なお神様は遺れるものをもつてこれをつないで、とうとうナザレのイエスという人において独子ひとりごを現わした。しかし、これを受けることが誰もできないで、とうとう十字架にかかつてしまうという、なんというのつぴきならない道だろうかと思う。

道は途絶えてしまつたんです、実は。イスラエルによつて来てたところの道が実は十字架でもつていつぱん断絶してしまつたんですよ。その断絶を、神の子を十字架にまでかけてしまうような悪いことを当時の御連中がなし、また私たちもそこに居たら同じくしたという、この人類の神への反逆というものがこの十字架に現われている。十字架は神の道がいつぱん断絶したんです。断絶したけれども、この断絶において初めて断絶を受けとつたのがキリストであつて、人類が断絶を受けとつたらこれはおしまいですよ、正直そのまま。ところが、この断絶を受けとつたのがキリストであつて、イエスはこの断絶を受けとつて、それを非連続の連続にしてくださつた。即ち復活して彼が見事にここに救いの道を開いた。

栄光のキリストは、創造の力の唯一善を

「我は善にあらず」

といった。しかしながら、唯一善がキリストにおいて現われた。「我は善に非ず」と言いながら、

「我を見しものは父を見しなり」

という、実にこれは驚くべき最大の矛盾の言です。しかし矛盾でもなんでもない。即ち、

「自分は善でない。私は何もできない、何も言えない、善きものにも非ず」

と、神の子キリストがこのことを言つたということを、皆さん、よく銘記してくださいよ。

「私はダメだ。私は行き詰まつている」

とか何とか、もういいですよ、そんなことは。決まっているんだから、私たちは。ダメに決まっているし、行き詰まりに決まっているし、かたくなに決まっている。そんなことはもういい。キリスト自身が、

「私は何でもない」



と、こう言うてくださっているんだから。

「私は何も言えない、何もできない、なぜ私をいいと言うか」

なんて、キリスト自身が、イエス自身が言うていらつしやる。いや実に、それを言い切ったところに福音の福音たる道がある。

●創造・救済・完成

彼は地上において善いことをなさらなかったけれども、彼は地上において罪びとの首^{かしら}になったからこそ、ヨルダンの河に身をとつぷり浸して、我々悔い改めを要する者のために、自分が、悔い改めを要する最大なものと彼はなつて、罪びとの首^{かしら}となつて彼はヨルダンに下つたから、

「我なんじをよろこぶ」

というのはその己を絶したところに臨んできたところの神の栄光の光が鳩の如く、滝の如く聖霊が臨んで来たというのは、これは即ち神様の栄光が、また本当の創造のわざがそこに現われた。と同時にその創造のわざ、栄光はただちに救済です。もう救いへの道です。

その「創造と救済」を神学で言いますが、「創造」と「救済」と最後の終末的な宇宙の「完成」が、いや実に切つても切れない関係になる。原始と終末が、

「我はアルファにしてオメガなり」

という。このキリストはアルファにしてオメガなるもの。創造にしてまた終末なるもの、そこにちゃんと彼は「救済」という中間を真中にもつてきて、創造と完成はピタッと一つに貫いている。

世界の神の歴史というものは、そのように創造から完成にわたるまで、所謂その時間はどれだけ長いかわらん。けれども、その長い時間は永遠という性格をもっている。そして実は、この真中の救済という、救いというところで創造と完成が焦点している。

私たちはキリストの救いというものにぶつからなかったら、神の創造なんていうことを瞑想したつて実は、大した意味はない。また世の完成なんてことをいつたつて、それはロマンチックなただあこがれに過ぎない。現実^{現実}に今というところにおいてこの救いがしつかり来ていなければ、神の創造は何であるか、終末的な最後の完成は何であるかは、実は身をもつて受けとるわけにはいかない。

イエス・キリストを私たちが受けとる時に、即ちキリストにおいて本当に唯一善が現われ、そして彼は自分をゼロにしたから、神が100%の神が入ってきた。即ち、

「汝の御意^{みこころ}を成させ給え、わがうちに」

といって、事実、神の善意志が、聖なる意志が彼において現成してきていた。霊なる法則、霊法が彼において自由に必然的に展開していた。これが即ち、私たちが自然を見るよりもはるかに自然なるものがイエス・キリストの実存である。このキリストの実存にぶつかつ



た時に私たちは初めて神の創造のわざがいかに素晴らしいかということがわかる。しかしながら、その

「キリストにぶつかる」

とはどのようなことであるか、ということになると、やはり話の焦点はこの十字架にきてしまう。この十字架において、どうにもならない私たちをすっかり贖いとしてしまった。

●聖霊のキリストの来臨

私は皆さんの中に今日、魂がなお今日、本当に碎かれぬなら、私はこの集会をやめたいくらいです。

魂がキリストの十字架でもって本当に碎かれ、十字架の碎けにおいて私たちは碎かれているということ徹底的に受けとつて――善も美もへつたくれもありませんよ、人間なんでもものは――そういう、一切のこの世のイズム、それがイデアリズムであろうと、ロマンティズムであろうと、リアリズムであろうと、何とかイズムであろうと、何とでも言わせておけばいい。それから何々宗教も何でもござれ。私はその点では、こと十字架のことに關しては徹底的に他のものとは別ちます。

このキリストの十字架の贖いにおいて、この碎けにおいて、私たちは本当に神の善、神の義、神の愛というものを真に受けとる道が開かれた。道が開かれて、そしてそこに臨んできたのが、あの福音書に出てくるところの復活の栄光のキリストです。栄光の神の来臨といふけれども、栄光の神の来臨は正に復活のキリストにおいて先ず始まった。復活のキリストは彼らに、エルサレムにおいて現われ、ガリラヤにおいて現われ、

「私は先にお前たちのところに現われるぞ、迎えるぞ、来るぞ」

という。復活のキリストが来て、やつと使徒たちもみんな目が覚めて、立ち上がったではないですか。立ち上がつてよく考えてみると、祈つてみると、

「ああ、十字架において私たちはとんでもないことをした。しかしながら、そのとんでもない事において、実は驚くべき神の栄光、キリストの恵みが現われていた」

恵みが現われていたということに気がついたんです。そこでパウロも立ち上がった。

まず実力をもつてキリストは来たんです、栄光のキリストが、復活のキリストが。けれども今度は、復活のキリストに出くわして目がさめたけれども、まだその覚め方は本ものではない。どこで本当に覚めたか。彼らが祈つて、

「お前たち、しっかりエルサレムにとどまつて祈れ。今に私はみ霊をもつてお前たちの中にやつて来るぞ」

と。この復活のキリストの次に、聖霊のキリストの来臨があつた。み霊のキリストの来臨があつて初めて、彼らの中に光が、生命が浸透したら、

「ああ、これが新創造、新しき創造である」



ということが彼らの中に魂の奥底から受けとられた。これが即ち、ペンテコステから発したところのことは、この使徒たちの言葉は即ち新しきうたであります。

この復活のキリストに私たちがぶつかって、十字架・復活のキリストにぶつかって――皆さんのいろいろな身辺の問題があるでしょう――その身辺の問題はこの一点でもって、どんな困難な、できない問題でありましても、どんなに紛糾してしましても、どんなにそれが固執の如くに持病の如くになっているやつかいな問題でありましても、十字架のキリストにきて、それが解かれない問題は絶対に一つもない。もし解かれないというならば、その人はまだ本当に十字架を受けとっていないというわけです。

「私はまだ現実には相変わらずダメです。かたくなで、まあいろいろなことで。また家の中にもいろいろな問題がありまして。また学校の問題もありまして。会社の問題がありまして」

と。いろいろな問題があるでしょう。いいですよ――「いいですよ」というのは、私は「いい加減にしておく」ということじゃない――けれども、このキリストの十字架を本当に受けとったならば、そこからその人を通して本当の砕けが現われてきて、そして相手を荷い、相手を溶かしていく。もし自分がかたくなであつたならば、

「ああ、私は間違っていた」

ということではなくてはいかん。これがなかったら、いつも他人を責めていたら――それは責むべきところが大いにある場合があります――けれどもいいです。けれども、なおそれを荷っていく人が本当に、

「己が十字架を負いて我に従え」

と。しかし、「十字架を負う」ことは復活のキリストが来ているからできるのです。

「我が荷は軽ろし」

と。私たちが本当に新しき歌がうたえるためには、この十字架・復活のキリストを受けとって、新しく創造される。そうしたら、本当にここに詩篇に書いてある通り、

「6 尊貴と稜威とはその前にあり能と善美とはその聖所にあり」

天界の聖所にあり、いや実にこの聖所は我が心のうちにあつた。

「わが心のうちに、汝の尊貴と稜威と能と善美とはわがうちに来りてあり」

と、詩篇の言が初めて本当に読めてくる。

「聖書は我につきて証するなり」

キリストを抜きにして聖書を読んだら、聖書の句は浮いてしまいます。キリストをよそにしたらダメです。いくらでも古典研究はしなさい。研究ではどうにもならん。

●死の竿頭からの突破

この間、私は或る所に行きました。学校の関係の方ですが、その奥さんが私の話を聞き



たいという。そのドイツ語の先生から普段、私のことを聞いているんですね、

「何しろ小池さんという人は……」

というわけで、聞いているらしい。是非いっぺん話を聞きたいというので――そのドイツ語の先生はクリスチャンでも何でもなし――それで、私は行つてあげた。そうしたら、もう一人別な奥さんを遠くから呼んで、二人で待っていました。アパート住まいの方です。そのドイツ語の先生と四人で座談的に私は話した。しかし、一人の婦人はなかなか素晴らしい経験をもっている。それは呼ばれた知人の方ですが――体は両方ともあまり丈夫ではない――呼ばれた方の婦人の人はある時、もう本当に医者に見放されて、近親の人も呼ばれたような危機の重態の事態におちいった。けれども、普段から聖書は読んでいた。そして、いよいよ死の竿頭^{かんとう}に立ちまして、その婦人は、

「ああ、自分は何と罪びとであるか」

という、或る罪の圧迫にグーッと迫られたそうです、重圧に。その時にその人はロマ書の3章をフト思い出した。あの有名なキリストの義のところを語っているところです。

「神の義はキリストにおいて現われた、そして罪のゆるしを^{きた}来した」

というところが初めてその時に、観念でなく魂の奥底から受けとられて、そして、自分は贖われていたということに気がついた。そして、本当にキリストの恵みにその時あずかったら、グーッと魂が軽くなったと共に、全身に力がきた。それで驚いたことに死の竿頭から突破しまして、その人は癒されてしまった。皆が、お医者さんも驚いたそうです。

「私は実はそういう体験があつたんです」

と。なるほど私はその奥さんに初めて会って、すぐこれはちよつと違うなということは感じたんですが。しかし、教会に行つてらつしやるものですから、どうも満ち足りないものが多少お有りのようで、私の話を聞いて、そういった死の竿頭を、罪の赦しから病のいやしを――詩篇103篇の、

「すべての不義をゆるし、すべての病をいやす」

という体験を――彼女はいっぺんしているものですから、私が話すとグングン吸い込むようにして入ってくる。もう私が帰つたあとで涙を流して感謝の祈りを捧げたそうです。

そういうわけで、その人はキリストの栄光を身をもって本当に受けて、彼女はそこに碎かれた。死の竿頭で碎かれた。そしたら、神様はこれを生き返らしてくださった。だから、もうほとんど復活みたいなものです。もうそこでもって罪のゆるしの体験を本当にしなかったらば、その人は倒れて死んだでしょう。確かにそうなんです。しかし、その体験を突破して、その人は救われた。

ところが、一般のキリスト教がその体験の質でないものだから、その人は何としても私の話を聞こうとして遠くからやって来たわけです。私も時間がもつとあつたらば、もつと深くそこで語り、また祈りたかったですが、早稲田のYMのことがあつたり、それから大事



な峯崎君のお父さんの死に出くわしましたから、その晩はそれでお別れしたわけですが。そんなわけとにかく、この点は絶対に――誤魔化しているならいくらでも誤魔化していい。いくらでも誤魔化しても結局です――しかし、それは結局、その人がいつまでたっても展開しないだけの話です。

●魂の創造としての救済

仏教でいえば「無量光」です。無量の光、また無量の生命、「無量寿」であり、また本当の「大慈大悲」であるところの、このキリストです。この無量光、無量寿、無量生を、本当の意味における大慈大悲をもっているところの、このキリストにぶつかる。そうしたら、神の今のその救いの点でそこへぶつかったならば、創造の御業を自分のうちに受けとらなければ、創造の神は讃えられない。救いの業を受けとらなければ、創造の神は讃えられない。実は人類の歴史というものは、本当に私たち一人ひとり個人の生涯において人類の歴史は完全に繰り返される。ここに反映している。私たちが「オギアー」といつて生まれた時は、

「光あれ」

という時の創造です。そして、最後に息を引き取る時は、新天新地への突入です。

「神は人を創って息を吹き入れ給えり」

という創世記第1章から黙示録の、

「来り給う」
きた

というところまでは、私たちが全生涯をもってこれを実は証している。証する義務がある。また、証しなければ本当の生涯にならない。だから、聖書は創世記から黙示録までは、身体をもって、生涯をもって読まなければ読めないわけなんです、頭では。神様は、自然的生命の創造から、今度は魂の創造としての救済をしてくださる。

昨日、私の誕生日を、私の「オギアー」を皆さんが祝ってくださいました。それは私の自然的生命の世界を祝ってくださいただけでも、しかし、それは私がそれをキリストの新生と二重写しでこれを受けとって――皆さんもまたその角度で祝ってくださいたと思いますけれども――二重写しでキリストの新生を受けとって、皆さんと一緒にキリストの新生を受けとって、ハレルヤだった。それでなければ意味をなさない。

この始めの「オギアー」という創造から、

「我、主に贖われたり」

というこの新生。それから、

「キリストの像に化するなり」
かたち

といって、次の世界に救い入れられて完成へと――完成しやしませんよ、勿論、私たちは死の最後に、完成しやしないけれども――その完成の世界に突入していくという驚くべき中において、この新生という救済、救いを中心として、創造と完成を、宇宙の完成を、神



の国の来臨をもっている。それはなるほど、この新生において神の国は来ているからです。神の国はきているから、新生において。

「何%が善くて、何%が悪いか」

なんて、どこで見るんでしょうね、その人の善悪というのは。外側は非常に善きような人がありますよ、

「ああ、あの人は立派だ」

と。けれどもわからん。これは哲学の世界でいえばカントがよく語ってくれた。藤井先生がかつてカントの道徳哲学を学んで、「善意志」ということをカントが言っている。

¹² 田畑とその中のすべての物とはよろこぶべしかくて林のもろもろの樹もまたエホバの前によろこびうたわん

よろこびと同時に讃美、讃歌をあげている。大自然に対してこう言っている。それは9節が大事なわけです。

9 きよき美しきものをもてエホバをおがめ全地よその前におののけ

¹⁰ もろもろの国のなかになしエホバは統治たもう世界もかたぐちたて動かさるることなしエホバは正直をもてすべての民をさばきたまわんと

この「正直」は「直」「まっすぐ」という。「心の正直者」、正しき者。詩篇33篇1節の「ただしき者」と同じ字です。33篇4節に「みことば直く」と、ここにも「直く」という字が出てきます。垂直の直の字です。神様との関係が垂直に立っている、まっすぐであること。曲線ではなくて直線です。

「エホバは統治たもう世界もかたぐちたて動かさるることなしエホバは正直をもてすべての民をさばきたまわん」

人間の関係も背骨が曲がっているといかんという。だから、西式健康法〔註… 西式健康法は西勝造が1927年に創始した健康法。西医学、西式強健術、テトラパシーとも呼ばれる。部分しか見ない現代医学を批判し、宗教医学一体論を唱える総合的な健康法である（ウィキペディアより）も背骨を真っ直ぐにすることを非常に大事な要素にしているわけですよ。

即ち、背骨がまっすぐである。姿勢を正しくしている。私たちも小さい時に、姿勢を正しくして坐ることを非常にやかましく言われたものですが、それで余りかたつ苦しくなった面もあるでしょうけれども。今はまたあまり曲がり過ぎていて。学校の生徒も、大体、姿勢が悪い。やつぱり、端座して直くあるということが、まっすぐであるということが、心の内側と外側とがまっすぐに立たなくてはいかん。相即しますから、この「直き」というのは大事なことです。神様との関係が直きことが、またそれが即ち義であるから、神との関係をまっすぐに立てていることが大事です。その内容からいうと、

「汝の聖意を成させ給え」

といって、神の聖意を立てることが、即ちまっ直ぐに立つことです。神様の御意を立てな



かったら、これはまっ直ぐに立たない。神の聖意みこころを立てなければ、自分の意こころなんか立てた
ってダメだ。これは曲がつてしまう。神の聖意を立てると、まっすぐに私たちの関係が立
つんですから。これは楽ですよ。神様の聖意は真っ直ぐに立って来るんだから。私の方を
まっ直ぐにしようとしたって、これは無理なんです。ところが、私は曲がるもんだけれども、
神様は真っ直ぐに立っているから、こんな曲がつている背骨は取ってしまったって、神の背骨
をちゃんと受けとることが、これが即ち義なんです。

これは勿論、西式以上です。私たちは神の聖意を受けとるという角度になれば、心は真っ
直ぐになる、義になる。それはまた善です。それがまた、愛です。これはみんな同じことです。
そうなって来たならば、これは固く立って動かない。こうなったら動かない。本当に動揺し
なくなる。そうして、たとえ動揺しても必ず大丈夫なんです、大黒柱が立つから。

11天はよろこび地はたのしみ海とそのなかに盈みるものとはなりどよみ 12田畑
とその中のすべての物とはよろこぶべしかくて林のもろもろの樹もまたエホ
バの前によりこびうたわん

「よろこび」「なりどよみ」「歓喜」「讃歌」をあげる。大自然に対してこう言っている。そ
うしたらば、天地は喜び、一切の讃美はどこから来るかということ、人間の世界が真っ直ぐ
になってこなければ、自然界は讃美しない。人間の世界が先に書いてある。民がすべて真っ
直ぐに、全能の神との関係が真っ直ぐに立ったならば、自然界はこれに応じて讃美する。
人間の世界が真っ直ぐに立たなかったところに、一切の罪はやってきた。自然界も決し
てよくはないですよ、ある意味において。動物の世界は闘争が行われている。植物でもあ
る程度あるかも知れません。けれども、その曲がりという、争いというようなものはやつ
ぱり人間の世界が曲がつているというところから来るというのが聖書の世界観です。

●神は既に地を審かんとて来り給えり

13エホバ来りたもう地をさばかんとて来りたもう義をもて世界をさばきその
真実まことをもてもろもろの民をさばきたまわん

という、この最後の一節に最大の重点をかけなければならない。

「神様はきたり給う、地を審判さばかんとてきたり給う」

と畳みかけて書いてある。「来り給う」ではない。本当は、これは完了型で「もう来れり」と、
非常に強い。ヘブライ語の本来の形からいうと、「来れり」なんです。

「神様はやって来られました」

「天国は近づきたり」と同じように、

「神様はきたれり、地を審かんとて来れり、義をもて世界を審き、その真実をもて
諸々の民を審き給う」

最後の「審き給う」のところは未完了形で、それはどういうことかということ、「来れり」



ということが、未完了的に受けとって、「来り給う」と訳したって、それはいいけれども、正直、この詩篇の作者は第二イザヤと同じ現実であるとするならば、栄光の主は来って、イスラエルを解放したんです。イスラエルをバビロニア捕囚から解放した。「エホバ来り給えり」なんです。また、「来り給いつつあり、来り給えり」と。そして、エホバの導きによってエルサレムに帰ってきた。それは同時に、私たちはむしろここでは今、ヘブライ語の形通りにその完了形をそのまま強く読んで、

「エホバはきたり給えり！ 栄光の神の来臨！ 既に来り給えり。地をさばかんとて来り給えり！ 義をもて世界をさばき、その真実をもてもろもろの民をさばき、また、さばき給わん！」

というわけです。「義」は「セデク」という字で、「真実」は「エムナー」という字ですから、「アーメン」という字です。この13節は詩篇96篇の一番のところだと私は思う——「私は思う」じゃない——そういうわけなんです。「キリストは来り給えり」です。

「キリストはきたり給えり、また地を審判かんとて来り給えり」

「我、地を審かんためにきたれるにあらず、救わん為に来れり」

と、キリストは言われました。けれども、キリストはまた別なところで、

「わが審判は正し」

と言われた。これは矛盾しない。いいですか。「審かんとて」キリストは来られたんです。キリストが来たときに、本当に審判が行われたんです、もう完全に。

●十字架は無言の赦し

キリストの言動というものを、当時の人は如何に受けとったか。いいですか、あの恵みを受けとった民衆は、御利益的に受けとった。それはそれ自身として悪くはないさ。悪くはないけれど、それは実は、キリストの福音の受け方の本筋ではなかった。恵みを受けとったから結構です。しかしながら、徴に、ただ徴の現象にとらわれたから、彼らは本当の信仰に突入できなかった人が多い。それはやはり、キリストの恵みの受け方が悪かったから、自分でやはり審きを受けているんです。本当の信仰に入れなかったという審判を受けている。恵まれつつ。

片一方の学者・パリサイ人たちは、キリストの事態に対して、その言動に対して非常に批判的である。そして、なんのかんのと問答するけれども、とても桁違いです。それで、

「これはかなわん、あいつはけしからん奴だ」

というので、とうとう陰謀をたくらんで、彼を十字架にかけることにしてしまった。キリストを十字架にかけたということは、これは最も恐ろしい審判なんです、神の子イエスを十字架にかけたということは。キリストを十字架にかけたという、神の子を、とにかく一応、死刑囚として死刑に処した——しかも最も残虐な死刑に処した——ということは、その当



時の人の、彼らの考え方、実存すべてが完全に実は反語的に審きを受けているんです。審きを受けている。だから、キリストを十字架にかけたということに対して、神の怒りが発すれば、人類は直ちに滅亡です。神の子を十字架にかけたら、これは滅亡ですよ。ああ、滅亡さ。十字架は、ある意味において、我々の滅亡の徴です。これは言い逃れるすべなし。神の子を十字架にかけたんだから。

「エホバは来り給う、地を審かんとて来り給う」

と。実にキリストは、その言をもつて、その行為をもつて、もろは両刃の剣をもつて、光の如き言行をもつて、正直、徹底的に審きつつ、しかもその奥には驚くべき恵みを持っていた。

私たちはこの世の裁判官で審判されるのと違いまして、神の子キリストの審きというものは、私たちを本当に審判即恩恵として、私たちに与えようとするところの審判である。だから、私たちが神様の前に、本当にキリストの前に立てないといつて、キリストに審かれるということは同時に、驚くべきキリストの恩恵の中に入ること、キリストの恩恵の中に入るためには私たちが審判を受けなかったならば、恩恵の中に入れない。この審判は悔改めという事態なんです。この審判をこちらが受けとるといふ事態が即ち、悔改め、「砕け」です。審判において私たちは悔改めにぶつかると同時に、恵みの世界に入る。

だから、霊的コンバージョンというのは、このみ霊のバプテスマというのは、回心というの、私たちが神の審きを受けつつ、キリストに在って神の審きを受けつつ、キリストに在って神の恵みの中に入ることなんです。

だから、審判と恵みとは、この福音の事態では、これがまたピタッと一つです。なんとすれば、十字架と復活が一つである如く、我々においては審判と恵みは一つ。神の子を十字架にかけるような悪いことをしていながら、

「彼らは為すところを知らず、その罪を赦し給え」

といつて祈ったその「赦し給え」との祈りは、実にキリストが自ら赦しを与えているから、「赦し給え」という祈りが本当の祈りなんです。キリストの恵みの祈りは、彼は自分で私たちのこの反逆の罪をすっかり受けとりながら、そして、血を流しながら生命を捨てたから、「赦し給え」との祈りは、たとえキリストが「赦し給え」と口ではおっしゃらなくても、キリストという十字架は無言の赦しを宣言している。

だから、キリストが大声をもつて叫ばれたときに、至聖所の幕が切つて落とされて、もはや大祭司が一年に一回、エルサレムの幕屋の中の聖所から至聖所に入る必要がなくなつた。人間の審判を、審判されながら、人を審きながら、そして人を恵んでしまったのが、解放してしまったのが、この十字架であります。

もし、胸に思い当たることがあるならば、その胸に思い当たる事柄において、

「私はキリストに間違っていた」

ということの一つの具体的な事実を通して自分全体がそこに救い込まなければダメです。



「この罪、かの罪」ではない。「この罪、かの罪」という一つの具体的なことを通して、その全体が救われるという世界ですよ。観念でただ言っているんじゃないですよ、私は。

たとえば、どうも酒飲むくせがあつて仕様がな、この酒飲む癖を自分は本当に止めなくてはいいかん。できない！ できないが、しかし、この「できない」が、十字架のキリストに入つてみたら、救われてしまうから、できるんです。それができる。

その他、私たちはみな、欠陥を持つていたり、ダメの者です。けれどもそれは、それができないところを為さしめるものは、それをキツカケに自分もろともキリストの中に入つて行つたならば――また罪を犯すかも知れない。けれども、いいです――必ずそのあとからまた勝つていく。それはこのキリストの恩寵は、斯くして次第次第にその人を勝利ならしめてくださる。この悲願において本当に生きるということを、誠心誠意やつていないならば、その信仰は嘘です。

●真実と信実

「エホバは来り給えり、地を審かんとてキリストに在つてきたり給えり」

と。ところが、私たちはキリストを審いたようなことをしたが、その審きはすつかり、実は逆に受けとつて、実は驚くべき神様の審判を、人間がキリストを審いたことにおいて、自らが完全に審かれてしまった。その審きは逆にすつかりキリストが受けとつて赦してしまつた。これが本当の大慈大悲というんです、もし「大慈大悲」を使うなら。いい加減で大慈大悲しているんじゃない。ちゃんと罪は、罪の事態を彼自身が引き受けているので、

「ああ、よしよし、まあいいよ」

といつて、ただ「よしよし」ではない。その「よしよし」は、キリストが自分で引き受けているから、本当に「よしよし」なんです。

「大丈夫だよ、いいよ」

というのは、キリストが自分で引き受けてくださっているからです。引き受けないで、キリストは空手形で「よしよし」なんて言っているんじゃない。キリストが私たちを「よしよし」といって、すべてを

「七度を七十倍しても」

赦してくださるのは、彼が常に新たに十字架の人であるからです。

このキリストを受けとるのに、ただ瞬間的な十字架をただお題目みたいに信じてみたつて、それはその人はそれだけの話です。問題は、それをどのように本ものに受けとつていくかということだけは、これはその人の実存それ自身がまた神の前にちゃんと顕われる。

「エホバ来り給う、地を審かんとて。エホバ、キリストに在つて来り給えり、神はキリストに在つて来り給えり。地を審かんとて、義をもて世界を審き、その真実^{まこと}をもてもろもろの民をさばき給わん」



と。正にキリストはこの十字架の義をもつてこの世界を審き、その真実をもつてもろろの民をさばき給わん。「その真実^{まこと}をもて」という。キリストの真実は、人間の真実なんてもとはちがう。

ゲーテの『ファウスト』の中の9984行のところに、

「人格には功ばかりでは物足りない、忠実というものがなくては」(佐藤通次訳)

「人格をつくるのは、功績や仕事だけでなく、その上に忠実がそわねばなりません」(大

山定一訳)

という言葉がある。忠実、信実、まことは、「アーメン」という字です。「しんじつ」の「しん」はこっちの「信」です。「信実」が人格を保つ、保持する。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト〔註： Wilhelm von Humboldt (1767～1835) はドイツの言語学者・政治家・貴族で、フンボルト大学（ベルリン大学）の創設者〕という人がその奥さんに宛てた手紙で、多分ゲーテのこのところを読んで書いたらしい、

「霊的な個性、人格というものがあつて、それには必ずしも凡ての人が到達するというわけではない。しかし、これは本当の魂の形成、本来の魂の形成としての、霊的な個性というもの、霊的な人格というもので、これは永遠的にして、そして移ろわざるものである。けれども、こういった霊的な個性、人格というものを形成することのできないような人は多分、普通の自然的生命の中に消解してしまつたろう」

というようなことを言っている。面白い言葉だと思う。そのゲーテの今の句の4行前に、「本当の崇高なところを欲しないところの人は、四大^{エレメント}の中に属する者だ。地水火風の要素の中に、普通の自然界の要素の中に属してしまつて、消えてしまつ」

「名を揚げたでもなく、気高い志をいだくでもない者は、四大に帰るほかはない。」(佐

藤通次訳)

「名を挙げたこともなく、まして気高い志さえ持たぬものは、地水火風の四大に帰るよ
り仕方がありません。」(大山定一訳)

という。やっぱりゲーテは「崇高なるもの」とか「人格」ということも大いに考えていた。それは未だゲーテの言葉では足りないのではありますけれども。即ち、

「信実^{まこと}というものは人格を保つ」

ということ。この「信実」というもの——藤井先生が旧い聖書の訳みたいなの「真実」ということをよく言われましたけれども——しかしこの「真実」を、実は私はこっちの「信実」の方の字に換えたい、信仰の信の字に。人間の所謂、道徳的性格の一つとしての「まこと」というようなことを、私は言おうとしているのではない。先生はそういう角度だったかも知れませんが——先生の批判はどうでもいいです——人間の徳性としての「真実」、まことということと言おうとしているのではなくて、私たちは実はそういった「真実」も持ち合わせない。これはもう「神を、キリストを信実^{まこと}とする」ということです。



「他のものは一切、虚偽であつてもキリストを信実とせよ」

と、パウロが言っているとおりで。信なるものは、本当に信なる神に向かつて、本当に「信実」を貫き、信実とは全人格を通して、神を「然り」ということを信というんです。この信仰の「信」の字は、「アーメン」というのは、神に向かつて「アーメン」であつて、自分に対しては「否」なんだから、これははつきりしている。キリストだけは本当に神に対して「然り！」といつて、己を「否！」と言つた。

「我は善にあらず、唯一善は神のみ」

と言つた。これが本当の信実の姿です。この信実をキリストは徹底的に生きた。自分の中に、

「神様に忠実であるということが出来る」

なんていうその能力や、そういう徳性というようなものを、そんなものは数えていやしない。その信実というものをもって、神を一切として、自分は常に砕けかかつて、千々に砕けている我です。まことに千々に砕けている。私は正に

「千々に砕けた存在」

である。そうでありたい。なかなかならないかも知れませんが、そうでありたい。千々に砕けたる我で、砕けた瓦みたいなものです。「ああ、あれは私です」と、こう言えれば本ものですが。砕けた瓦で、どうにも何の役にも立たないで、皆に捨てられてしまうもの、

「あんなものは何の役に立つか」

というものが自分でありたい。これは一番、楽なもの。何かになろうという必要がないので、「一番みんなに捨てられてどうにもならない」

というようなわけです。大分、私はみんなに捨てられていきましたけれども、無教会の方々に捨てられてしまっているようですが、まあいいですよ。とにかく、この信実です。

●終末的現実

この間、古い、或る友人と早稲田のWMの会合で隣り合わせたからお話して、

「どうも無教会も困つたものだな」

と言つたら、大いに共鳴してくれました。それは結局、自分の側の「真実」なんか考えているから、おかしいことになる。そうすると、パリサイになるから。

しかし、神様に対して本当に「信実」というところに、自分を信実ならずとして、自分をすっかり投げ出している姿において。

「それでは、私は虚偽をやつていいか」

と。そういうことでは「決して然らず」とパウロが言うとおりで。それが即ち、

「義をもて世界を審き、信実をもてもろもろの民をさばき給わん」

ということ。キリストがこの信実をもて神様に仕えたから、キリストは神の義となった。神の義となつたんです。神の義が彼に顕われたんです。神の義の結晶体となり、権化とな



った。即ち、義、信実は、

「義は神から降り、信実はキリストより発していた」

「義は天より臨み、信実まことは地より生えた」

と詩篇の85篇11節にあつたでしよ。

「信実まことは地より生え、義は天よりみおろせり」

と。10節には、

「あわれみと信実まこととともにあい、義と平和とたがいくちづけに接吻せり」(詩篇85・10)

と書いてある。そういうような、天地相応えて、義と信実が相応えて入る世界が終末的現実なんです。即ち、キリストが既に新天新地の完成の事態を、彼はその実存をもって既に天国体として現われて、救済のキリストが同時に完成の天国をちゃんとそこに現じていた。だから、死人を甦えらせる力を持っているんです。

このキリストは、死人をも甦えらせる力を有もっていることは、即ち、新天新地の出現することを、彼は徴をもつてちゃんと為し給うた。即ち、信実と義と――信実はもう「信」の字一つで結構です――この信まこと、ピステイス、グラウベン、ヴァールハフテツヒカイト、アーメン。この「アーメン」「信」というのと、「セデク」「義」というのが、天地相応えているのが、これがキリストの立体的な天国です。聖意の天に成る如く、地に成っている。聖意の天に成る如く、天の靈法が地上にあつて展開したのがキリストの実存さ。そういう角度で、福音書を読まないで何を読んでいるかと私は言いたいんだ、本当に。そのような聖意靈法がキリストの行くところとして現われざるなしというのが、この福音書の事態ですから、「教え」だなんて言っているから、いかんですよ。教えじゃない。そういう栄光が現じているんだから、栄光の世界に入っていく。

キリストの信の中に私たちが十字架・復活をもつて入れば、これを信実という。このときに初めて人格ペルソナは、真の人格は、永遠不滅に私たちは展開して行く。エレメントに消解しない。私たちのこの個体は、「ガイステイゲ・インディヴィデュアルテート」(geistige Individualität) というものは、キリストの靈的、キリストにおける「御霊の個体」というものは、これは絶対に不滅であります。これはゲーテが素晴らしい言葉を吐いてくれたが、しかし、ゲーテが言わんと欲していることをもつと深く私たちが洞察して言い得るのは、やはりキリストの光によるからです。まあ、もう一つダンテを引用すればいいわけですが、今日は止めておきます。

信・義、義・信、これにおいて私たちの人格が本当に形成される。また、展開していく。そういった義と信の世界を往く、信・義の世界を往く。義・信の世界を往く人格であるというなら、正に私はこの角度から言いたい。そして、この筋金の入っていないような、いわゆる靈的なんていう人たちが、いい加減な、人を利用するようなことをするのなら、私は絶対に「否!」です、そういう事態に対しては。皆さん、そこは黄金中道わきまを深く弁えて行つ



てもらいたい。いわゆる「霊的」なんてこともつて、とやかく優劣を考えてみたり、そして、何かそんなことに囚われたら、信仰それ自体がおかしくなる。

●地上から次の世界に入る

スエーデンボルグとか何とかいう素晴らしい人たちを、もし、そういうキリストの信義の世界をぬきにして、キリストをぬきにして、そういったものに没頭すると、事実、信仰がおかしくなっている青年たちが幾人かあることを私は知っている。どうにもならなくなっちゃうんです、そんなことをしていると。だから、青年に限らず、何に限らず、問題はキリストの他の何ものにも囚われたらダメだ。必ずダメになります。

どうか、皆さん、捕らわれるなら、キリストの捕らわれ人に――パウロは自分を

「キリストの捕囚者、キリストの下僕」

と言った――それならば大丈夫です。しかし、それであつて、いい加減なところに行つたらば、それはキリストの本当の信実の世界を、本当の人格ということから抜けてしまう。ですから、そういった意味において、もしいわゆる霊的賜物のある人たちがいい加減な実存をして、人をまるめ込むようなことをするならば、私は観念信仰の方が好きです。とにかく、道が立っていないことはいかん。しかしながら、観念では本当の神の生命、力の生命がやっぱりズレているから、

「観念に非ず、御利益に非ず、霊的傲慢に非ず」

と私は申し上げている通りなんです。それが即ち、この義・信の世界です。全くキリストの、唯一善の、この実存の世界を往かなくてはいいかん。そしてまた、ここを往く限り、絶対に行き詰まりをきたらせない。そして本当に祝福される。真の審きが、

「審かんとて来り給えり」

ということの奥に、詩篇96篇には言っていないけれども、

「信実をもてまろろの世界を審き給わん」

という、このキリストの義の、キリストの信実の審きというものは、それを本当に受けければ、同時に恵みの中に入っていく。キリストの審きを本当に受けて恵みの中に入らないことはないです。ああ。わかったですね。

だから、キリストの審判は恐ろしくない。恐ろしくないということは、「いい加減にする」ということじゃない。これを本当に受けとつたならば、そこにぶつ倒れたら、必ず起こされて、今まで通りよりかもっと素晴らしい人にされる。もっと驚くべき祝福の中に、歓喜の世界に入るんです。審判即恩恵、ということ、皆さん、「栄光の神の来臨」ということにおいて、キリストにおいて顕われた栄光の神の来臨ということにおいて、我々は審判即恩恵の中に、

「義をもて世界をさばき、その信実をもてまろろの民をさばく」

民を審きつつ、この審判に本当に入っていけば、恩恵の中に入る。



それで、私はこういうことを言っているか悪いかわからないけれども、最後の審判がやってくる時に、最後の審判の時に本当に神様の審きがきて、その時にでも、

「本当に私は悪かった!」

と言う魂は、神様は救うかも知れない――それは聖書には書いてない――けれども、その時になお、この審判に対して「然り」と言わない者は地獄に入る。これははつきり入る。永遠の滅亡^{ほうび}に入る。

とにかく、私たちはこの地上から次の世界に入ります。どういふところに入るかは、みなその地上の実存が決定するらしい。どこかをさ迷うかも知れないが、しかし、魂は常に祈り求め、また地界の人は天界の人のために執成し、天界の人はまた地界の人たちの為に執成し、歴史の最後に向かって進んでゆく。そして、最後の時において――最後の審判以前になお悔改める時があるだろうと思いますが――その時に本当に、そういったような人たちも、一人でも多く救われんことを念願する。審きというものは何かというと、そういったサタンと罪と死の世界をはつきり見せて、それから救いの世界に入れようというんですから、これを誤魔化していたら入れないわけです。

それはさっきの一人の女性が、死の竿頭にあつて、罪の意識に責められて、

「神様、私は悪うございました!」

と。その「悪うございました」が、ただ「悪うございました」ではどうにもならない。このキリストの十字架の贖いを受けとったものだから、

「ああ、贖われていた! 自分はこんなに悪かったけれども、贖われていた」

ということに気がついたから、俄然、審きが、罪の認識がきて、キリストの十字架において罪の認識をしたらば、復活のキリストにおいて、そこに俄然、死の竿頭に展開を来してしまった。こういうわけであります。

十字架上の盗賊もその通り。「マイナス99」の生涯を送つてきて、最後の一点にきて、

「私は悪かった。十字架にかかるのも仕方がない。どうか、しかし、あなたが御国を来らせる時に、私を覚えてください」

と、魂が碎けてキリストに言つたら、

「汝、今日、我と偕にパラダイスに在るべし!」

と。盗賊はキリストと偕にパラダイスに真つ先に入つて行つた。そこに彼の悔改めが驚くべき展開をさせてくださった。これは悔改めが天国に入れたのではない。キリストの十字架がこの悔改めを受けとつて、天国に入れてくださった。その意味において、私たちの本当の悔改めにもたらしめるものは、天界にもたらしめるものは、天上下ただキリストの十字架あるのみ。これは即ち、審きであつて同時に救いである。

「エホバ来り給えり、地を審かんとて来り給えり、義をもて世界をさばき、
信実^{まこと}をもてもろもろの民をさばき且つ救わんためなり」



という。おわります。

●祈り

憐れみ深きお父様！ 詩篇96篇を通し、キリストの来り給いしことを、わが身にそれぞれ受け奉り、天国を即ち身に受け、而してはじめて「主よ来り給え」との、また、「来り給う」との、祈りと確信とを与えられ、感謝であります。どうか、この兄弟姉妹たちがいよいよ碎けに碎け、キリストの碎けを戴き、そして本当に自由無碍^{むげ}なところの魂とせられ、神様、喜びと愛と能力^{ちから}と智慧を限りなく展開し給わんことを願ひ奉ります。

最近、峯崎兄弟の、三人兄弟のお父さんが天上に召されました。実にそれは素晴らしき凱旋でありました。彼は黙々として羔の如く、その十字架の生涯を送りました。そして、この三人が実に福音の中に斯くもみな展開致しました。そして、「我がこと成れり」との事態を身に受けつつ、彼は地上の生涯を^{おわ}りました。お父様、本当にこれは聖旨であることを信じ、彼の凱旋を、聖名をもって聖名に在って、高らかに讃美し奉ります。どうか、この三人の兄弟をいよいよこの父の実存をもつてしたところの道の跡をいよいよ喜び勇み、天地相応えて勇ましく進ましめ給わんことを願ひ奉ります。

今、心からの感謝と願ひ、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により捧げ奉ります。アーメン。お話しているうちに、私は大事な一個所を引用するつもりで、つい忘れちゃったので、ちよつと捕捉しておきます。使徒行伝17章の30節。今日の13節の終りのところで、是非この一句は引用しようと思っているうちに、なにかどこかへいつてしまつたんですが。

「³⁰神はかかる無知の時代を見過しにし給いしが、今は何処^{いずこ}にても凡ての人に悔改むべきことを告げたもう。³¹曩^{さき}に立て給いし一人によりて、義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に与え給えり」(使徒行伝17・30、31)

という、パウロのアレオパゴスにおけるところの演説の一句です。これは本当に今日の最後のところに非常に大事なことで、もう内容的には、私はこのことを言つたんですが、どうかこの聖句を忘れないように。

「凡ての人に悔改むべきこと……一人によりて、義をもて世界を審かんために日をさだめ、

キリストの日です。

彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に与え給えり。人々、死人の復活をききて、
或者は嘲笑いしが……」

ということが書いてあります。では、おわります。

